

日清紡浜松工場とその建築群に関する予備調査研究

I - 1・研究概要

(研究目的)

浜松地区の生活文化を継承する歴史的建造物及び、その文化財予備軍に付いて研究し、21 世紀における遠州地方の生活文化のあり方を模索する。

(平成 14 年度実施項目)

- － 1 竹山家調査（静岡県の建築家・中村与興平の設計と見られる家屋調査）図面化
- － 2 笠井街並み調査（笠井町の街並み全数建物実施調査）
図面化・まちづくりセンターで展示
- － 3 浜北日清紡工場調査（工場建物予備評価）

(期待される効果)

- － 1 遠州地域の生活文化と文化財マップを作成する。
- － 2 まちづくり市民運動との連携してまちづくりの資源とする。
- － 3 歴史的建造物の評価方法を構築する。

I - 2・共同研究者と分担

- － 1 空間造形学科 渡邊章互 総括、会計
- － 2 空間造形学科 井上允彦 構造、工法調査
- － 3 空間造形学科 深田てるみ 生活、歴史調査
- － 4 学外 古山恵一郎 郷土史（設計事務所）
- － 5 学外 大和田清隆 都市工学（まちづくりセンター）
- － 6 学外 長谷守保 調査全般（設計事務所）
- － 7 学外 土屋和男 調査（常葉学園大学）

II - 1・調査報告 日清紡浜松工場の建物評価（渡邊）

日本の近代化に貢献した産業の建造物として、近々廃止される日清紡績株式会社の浜松工場（以下、「日清紡浜松工場」という）について報告する。かつて、静岡県近代化遺産の候補となったようであるが、当時は文化財に指定される事の煩わしさから調査を断ったとのことであった。

日清紡浜松工場は、地域文化の関心が高くなってきた今日、大型の近代化遺産となる可能性がある。日本は、近代化に大きく貢献した産業遺跡というものは欧米に比較して数が少ない。それというのも、戦後の経済成長において、工場は次々と新しい生産設備に更新し、その都度その器である建造物も建替えられてきたからと考えられる。

今後の活用法については別の課題として、現存する敷地と建物について予備評価を行った。

－ 1・日清紡浜松工場の沿革概略

大正 14 年、日清紡が浜北に浜松工場を計画決定

地元は用地買収に協力して 38000 坪を用地として準備

30000 坪工場用地 混紡工場、原綿倉庫、工場内女子寮等 20 数棟建設

4000 坪男子工員の寮

4000 坪を管理職（当時は高級社員）社員社宅

貴布禰駅から貨物引込み線を建設

大正 15 年第 1 工場、第 2 工場、原綿倉庫等が完成。昭和 2 年操業開始

昭和 13 年、第 3 工場建設

昭和 20 年代の糸偏ブームで最高潮

昭和 30 年代に入り次第に低迷し始め、順次規模縮小される

平成 16 年 3 月に工場閉鎖予定となる。

－ 2 ・ 工場 の 現 況

工場は、現在の遠州鉄道鹿島線浜北駅より北西に約 500m の位置にある。かつての貨物引き込み線の跡も地図の上に痕跡が残る。浜北市にとっては大きな面積をもつ駅近接の敷地として、都市計画上の大きな影響をもつ位置と大きさを持っている。

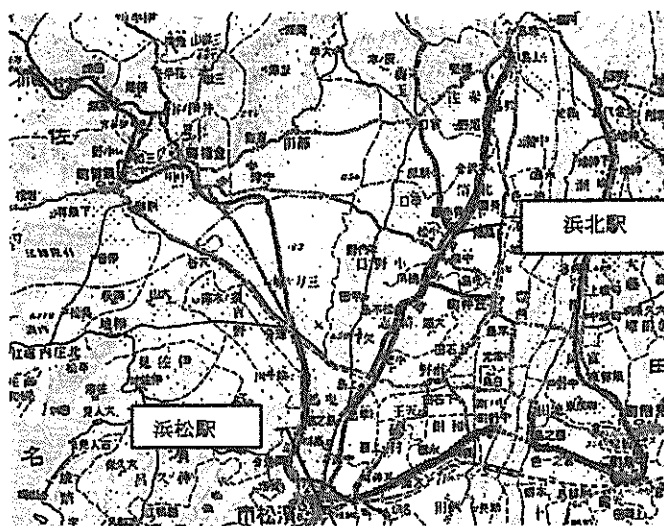
敷地はすでに北側 1/3 が大型商業施設「アピタ」として開発がされている。残る 2/3 の工場用地がどのような用途になるかは浜北市にとって大きな課題である。

工場がこの地に誘致されるにあたって、当初は交通の便が悪い事が懸念されたとのことであったが、浜松電気鉄道(現在の遠州鉄道)の二俣線(現在の鹿島線)が大正 12 年に軽便鉄道から国鉄と同じ軌道巾に改軌され、同時に電化されるとともに浜松側も国鉄浜松駅まで線路が延長されて貨物の乗り入れが出来る事などから、日清紡はこの地に工場を建設の意思決定が出来たという。

当時、浜松にはこの二俣線以外に、中の町線、笠井線、奥山線等の軽便鉄道があったが、生き残ったのはこの鹿島線だけである。今の浜北駅は、昔の貴布禰駅であり、この貴布禰からは官口にまで支線(西遠軌道(株))が伸びていた。その官口線は予想に反して顧客が少なく、大正 12 年には廃線となり、その跡地を用いて工場内へ貨物の引込み線がつけられた。

二俣線は、この日清紡の貨物便のおかげで戦後も生き延びる事が出来た。大正 15 年には年間 3 万トンの貨物扱いが日清紡の開業と共に 8 万トンに増え、乗降客も 82 万人であったものが 130 万人を越す数値となった。

交通の便が工場を支え、交通と産業が互いに支えあった産業共存の事例である。また、この二俣線によって若い工場労働者が浜松の夜間学校に通う事も出来、産業の人材育成にも貢献している。



図一 1 昭和 5 年 1/20 万の地図、浜松駅を中心として西から奥山線、二俣線(鹿島線)、東に中之町線が延びている。二俣線の支線の形で西に官口線、東に笠井線がある。各々昭和 12 年と 19 年には廃線となっている。中之町線は昭和 12 年に廃線。奥山線は戦後まで利用されたが、バス便との競争に負けて新幹線の開通 1 カ月後に廃線。



図一 2 浜北駅との関係

－ 2 ・敷地と評価対象建物

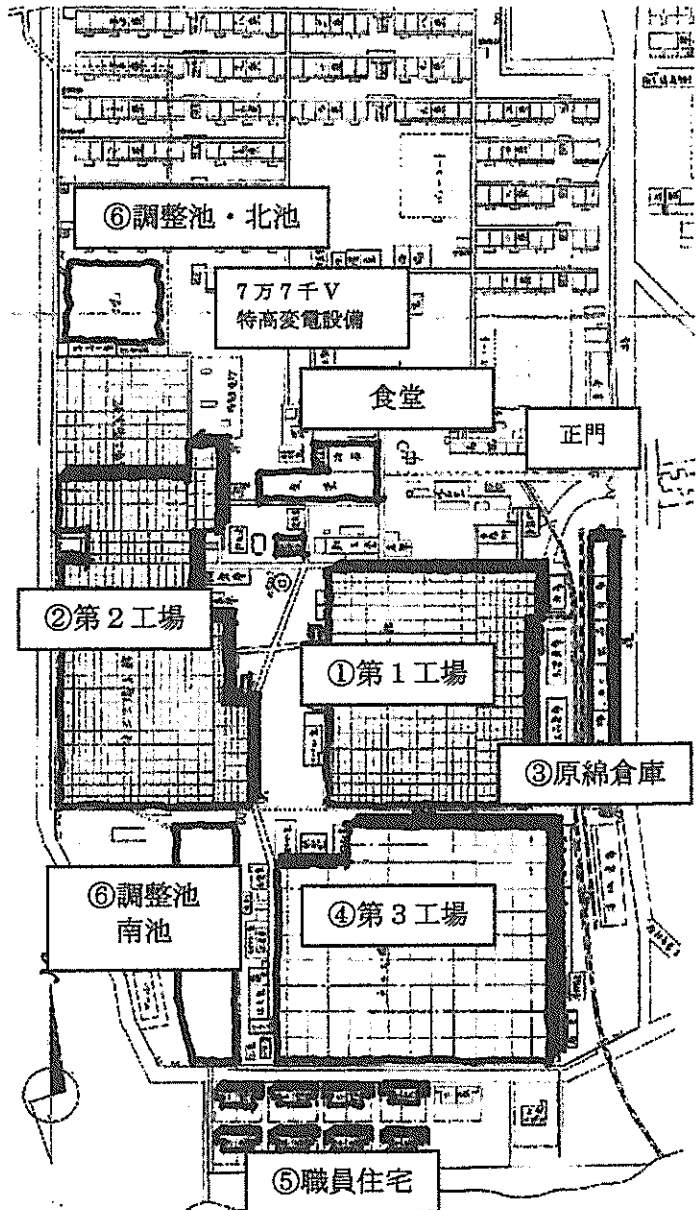
工場全体のレイアウトは図－3のようになっている。昭和2年の開業時から基本的には変わっていない。建替えることなく、増築と設備改修を主体としてきたので当時の建築技術などを評価する重要な建造物といえる。

今回調査対象とした建造物は、①～⑥の施設である。詳細に調べるとこの建物以外にも貴重なものがあるかもしれないが、手がかりになる資料がないので主要建造物の予備調査の段階に止まっている。

紡績工場として、これだけ群として一箇所に残された施設は珍しい。今日まで使用されていたので建物の保存状態は良好であり、耐震補強は必要ではあるが、そのまま使用しつづけることは十分可能な状態である。

こうした大規模工場は、当時の最先端の生産技術による機械群が詰まった当時のハイテク産業であったろう。日清紡の社員も、往時の繁栄を知る人も少なく、近代化遺産の情報を調べるにあたっては期限が無いように思われる。早急な詳細の調査が必要と思われるが閉鎖の時期が確定し、閉鎖に伴う資産の整理としての建物解体が目前に迫っている。

図－3 建物配置



1・土地面積	131,104 m ² (39659 坪)
工場用地	105,801 m ² (32005 坪)
社宅用地	16,080 m ² (4864 坪)
グラウンド	9,223 m ² (2790 坪)
2・建物面積	58,497 m ² (17695 坪)
内工場建物	50,767 m ² (15357 坪)

次項に作成した建物予備評価シート7枚は、静岡県近代化遺産総合調査におけるシートを参考として作成した。

－ 3 ・ 建物予備評価シート

近代化遺産（建造物等）総合調査表

		近代産業遺跡		
名称	にっしんぼう・はままつこうじょう 日清紡浜松工場・工場内建造物			
所在地	〒434-8586 静岡県浜北市貴布祢 1200 番地 電話 053-586-2151			
所有者	日清紡株式会社			
住所	〒434-8586 静岡県浜北市貴布祢 1200 番地 電話 053-586-2151			
管理者	日清紡株式会社			
用途・目的	紡績工場	竣工	設計者	施工者
調査対象 建造物	第 1 工場・第 2 工場 原綿倉庫 第 3 工場 職員社宅 調整池 2 箇所	大正 15 年 大正 15 年 昭和 13 年 昭和 13 年	不明 不明 不明 (KHのサイン)	不明 不明 鹿島建設
指定・登録	なし			
沿革	大正 15 年 11 月 28 日建物完成。昭和 2 年稼動：第 1 工場と原綿倉庫が稼動、 続いて昭和 3 年第 2 工場稼動。 昭和 13 年：第 3 工場は鉄骨トラス、紡績機の動力は組み込み個別モーターか？ 昭和 13 年：職員社宅 戦後：湿度調整のための空調導入？それにともない断熱工事			
修理内容	工場の規模拡大の増築以外に、全体的に防火壁と防風壁の増設、空調設備、断熱工事などが行われた。			
現状 所見概要	<p>第 1、第 2 工場：近代産業の象徴である鋸屋根を持った昭和初期の建築物。今日の構造計算では外周部の鉄筋コンクリート壁の強度に不安があるが、内部の木造部は適切な管理がされており保存状態良好。採光窓は木製サッシ 2 重ガラスに改修されている。</p> <p>機械が撤去された跡の内部空間は、多柱大空間として現代においては貴重な空間として評価する事ができる。</p> <p>原綿倉庫：レンガ造建築として、今後建設される事はない建築物として貴重。倉庫なので出入口のみが開口部、壁が多いので補強はし易い。</p> <p>第 3 工場：大型機械を納めるために鉄骨造による大スパンとなってきた。しかし、雨漏りなどが激しかったためか、屋根には建設時の屋根にスレート屋根がのせられている。空調コストを配慮したためか天井が低い。</p> <p>職員社宅：2 戸連棟の長屋建住宅 9 棟。延床面積 1 戸約 27 坪の 2 階建て木造住宅 3 棟と平屋建て 6 棟が現存。民間企業における厚生施設として産業発展において果たしてきた役割を知る上で歴史的な価値がある。これまでにこうした住宅が保存されていることを聞いた事がない。</p> <p>貯水池：工場の雨水排水の調整池。それに工場の地下水を用いた空調の排水をしている故に綺麗な水を常に蓄えた池になっている。人工的な調整池であるが、現在は水鳥も憩う自然な池になっている。</p>			

近代化遺産（建造物等）調査票－①

調査年月日 平成 16 年 1 月 7 日

調査者 静岡文化芸術大学 空間造形学科 渡邊章互 連絡先 053-457-6226

市町村名	浜北市	分野	近代産業遺跡
名称	にしんぼう・はままつこうじょう・だいいちこうじょう 日清紡浜松工場・第 1 工場		
旧名称			
所在地	〒434-8586 静岡県浜北市貴布祢 1200 番地 電話 053-586-2151		
所有者または 管理者	日清紡株式会社	連絡先	〒434-8586 静岡県浜北市貴布祢 1200 番地 電話 053-586-2151
主材料	鉄筋コンクリート+木造 木造部柱：7 寸角、トラススパン 22 尺、下弦材 8 寸×4.5 寸、上弦材 7 寸×4.5 寸、斜材巾 4.5 寸×6 寸・4.0 寸、引っ張り材径 21mm 鉄筋。明り取り：ハイサイド・ライト木製サッシ 2 重ガラス		
構造及び形式	1 階建て 外周 RC 木造片流れトラス多柱構造 トラス下 4.5m	規模	南北約 22 尺×20 スパン 375.5 尺 114m 東西約 12 尺×29 スパン 324.0 尺 98m 面積 3379.5 坪 11.172 m ²
竣工	大正 15 年 昭和 2 年稼働開始	設計	不明
		施工	不明
改修の記録	時期不明：空調工事、断熱工事 戦後の工事と見られる（図面には昭和 38 年とある） 時期不明：屋根の葺き替え（元は和瓦）		
特徴・所見	<p>近代の工場の典型的な木造鋸屋根構造。不思議な事に、大空間が単一のスパンで構成されているのではなく、複数のスパン寸法で構成されている。木造片流れ屋根のトラスは、当時の洋風建築が、地方の伝統的木造技能者によって建設されたもの。外周部は昔の鉄筋コンクリート壁であり耐震力は期待できない。木造部分は補強をすれば十分使用可能。補強の方法によっては自立構造になりえる。</p> <p>屋根は当初、和瓦葺きであったが後にスレート葺きに改修。</p> <p>紡績機械が大型になるにつれ柱が邪魔になり、部分的に柱をとって鉄骨梁でスパンを大きくしたスペースがある。</p> <p>現在の工場内部に RC の壁の列があるところを考えると、当初の工場に大掛かりな増設を施した模様。また、西風を防ぐために後から RC の妻壁に防風壁が増設されて西側からは鋸屋根は見えない。時期はまだ不明であるが、湿度調整のために全館ダクトが施されている。そのため後から断熱工事が施されている。工場としては高性能な建築といえる。</p> <p>このような建築物はこれから先建築される事はないのできわめて貴重なものである。</p>		
由来及び沿革	昭和 2 年（1927）～平成 14 年（2002）使用		
関係資料	文献・図面・写真・文書 ① 紡績機械全体レイアウト図 ② 防風壁増設図 ③ 断熱工事図	利用状況	当初のまま 改造して利用 廃業・廃屋：平成 16 年 3 月予定 その他

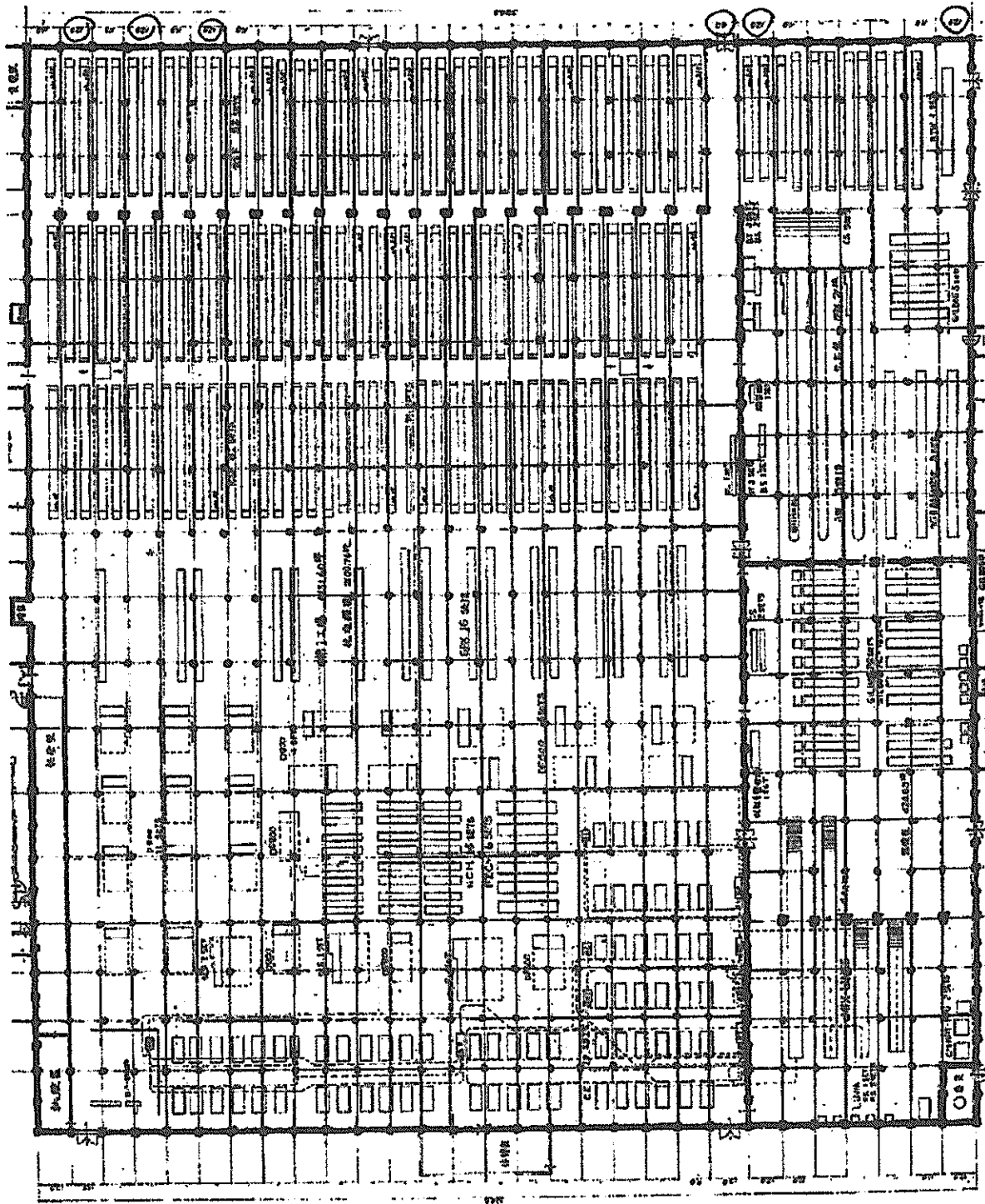


図-4 第1工場の機械レイアウト平面図：南北 114m×東西 98m、面積 11172 m² ((3380 坪)。詳細に見ると、柱の間隔が完全な均等間隔ではなく数種類のスパンで構成されている。理由は不明。また、内部にあるコンクリートの壁の位置が当初の第1工場、東側と北側は増築を施したものと考えられる。

近代化遺産（建造物等）調査票－②

調査年月日 平成 16 年 1 月 7 日

調査者 静岡文化芸術大学 空間造形学科 渡邊章瓦 連絡先 053-457-6226

市町村名	浜北市	分野	近代産業遺跡
名称	にしんぼう・はままつこうじょう・だいにこうじょう 日清紡浜松工場・第 2 工場＋織布工場		
旧名称			
所在地	〒434-8586 静岡県浜北市貴布祢 1200 番地 電話 053-586-2151		
所有者または 管理者	日清紡株式会社	連絡先	〒434-8586 静岡県浜北市貴布祢 1200 番地 電話 053-586-2151
主材料	鉄筋コンクリート＋木造		
構造及び形式	1 階建て 外周 RC 木造片流れトラス多柱構造 トラス下 4.5m	規模	南北約 22 尺×22 スパン 484 尺 147m 東西約 12 尺×14 スパン 164 尺 51m 面積 2200 坪（約 7500 m ² ）
竣工	昭和 3 年稼働開始 織布工場増築：昭和 8 年	設計者	不明
		施工者	不明
改修の記録	当初の第 2 工場に織布工場を増築しているために何処までが第 2 工場かが分かり 難い。その後織布工場の一部取り壊して現状に至っている。 昭和 31 年：西側防風壁 昭和 36 年：屋根断熱工事 昭和 38 年：明り窓 2 重ガラス工事、矢切妻壁断熱工事		
特徴・所見	ほぼ第 1 工場と同じ時期に同じ建て方をされた工場。 元工場 22 スパン×14 スパン＋織布工場 16×13 スパン。現状は第 1 工場と 同じ程度に良好。工場としては建物の保温工事がよく行われている。 現状は、西側は工場敷地いっばいに建設され、西側からの工場内への搬出入も できるようになっているが、西側はすでに住宅街になっているので、このままの 保存は難しいと思われる。 図面が多少残されているので、第 1 工場の詳細を推定するのに役に立つ。		
由来及び沿革	昭和 3 年（1928）～平成 15 年（2003）6 月まで使用 織布工場 昭和 8 年（1933）～平成 8 年（1996）まで使用		
関係 資料	文献・図面・写真・文書 ① 外周 RC 壁図 S2/10 ② 防風壁図 S31/3 ③ 小屋組み保温工事 S36/8 （和瓦） ④ 採光窓 2 重ガラス工事 S38/4 ⑤ 矢切保温工事 S38	利用 状況	当初のまま 改造して利用 廃業・廃屋：平成 16 年 3 月予定 その他

近代化遺産（建造物等）総合調査票－③

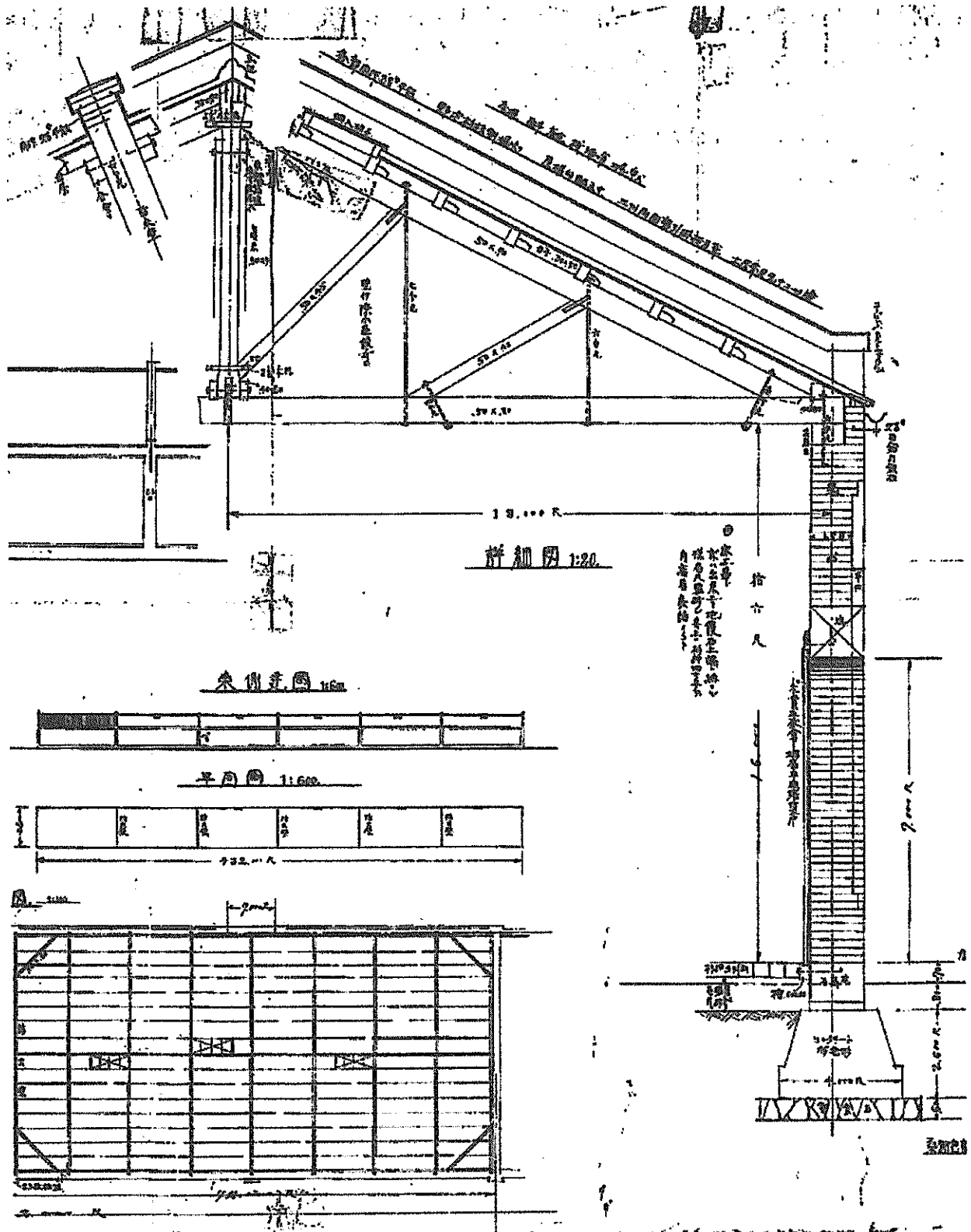
調査年月日 平成 16 年 1 月 7 日

調査者 静岡文化芸術大学 空間造形学科 渡邊章瓦 連絡先 053-457-6226

市町村名	浜北市	分野	近代産業遺跡
名称	につしんぼう・はままつこうじょう・げんめんそうこ 日清紡・浜松工場・原綿倉庫		
旧名称			
所在地	〒434-8586 静岡県浜北市貴布祢 1200 番地 電話 053-586-2151		
所有者または管理者	日清紡株式会社	連絡先	〒434-8586 静岡県浜北市貴布祢 1200 番地 電話 053-586-2151
主材料	無筋レンガ造壁（厚さ 40cm 高さ FL から 4850） 木造洋小屋（スパン 10.908m トラス間隔 2.730）		
構造及び形式	1 階建て レンガ造 基礎深さ 1030	規模	南北 131m×東西 11m 壁心面積 約 1441 m ² （436 坪） 内法面積（409 坪） 防火壁 5 枚（1 区画約 22m）
竣工	大正 15 年竣工	設計者	不明
		施工者	不明
改修の記録	和瓦葺きを波型スレートに変更（時期不明） 床：4.5 寸角杉をコンクリートに変更（時期不明）		
特徴・所見	原綿倉庫概要：1 区画 72 尺×36 尺（72 坪：238 m ² ）のレンガ無窓倉庫が 6 連棟。防火壁 5 枚。全長 131.04m、スパン 10.92m、壁厚 40cm、軒高約 5m、出入口アーチ厚さ 50cm 開口巾 7 尺高さ 9 尺。レンガはイギリス積みであるが目地が通っていないところを見ると素人が積上げた模様。外側は、防水塗料（白色）を塗布。（時期不明）無筋なので現在の耐震力は震度 5 まで。再利用のためには耐震補強が必要。 洋小屋トラススパン 10.920mm、トラス配置間隔 2.730mm。下弦材 240×150、上弦材 210×150、真束 150×150、斜材 135 と 120×150、ポスト 21mm と 18mm 鉄筋、触れ止め 2×60×120、母屋 90×150@750。天窓 750×1820 3 箇所。小屋トラスは今後そのまま活用可能と思われる。 できれば、屋根は瓦葺きに戻したい。ただし総合的な構造計算が必要。		
由来及び沿革	昭和 1 年（1926）～平成 11 年（1999）まで使用		
関係資料	文献・図面・写真・文書 ①原綿倉庫新築設計図 昭和 2 年と思われる。原田名の押印がある。	利用状況	当初のまま 改造して利用 廃業・廃屋：平成 16 年 3 月予定 その他

（付記）貨物引き込み線は昭和 28 年まで稼動していた。

図-5 原綿倉庫
レンガの産地は不明
イギリス積みのレンガ施工は粗い
小屋組みはしっかりしている



近代化遺産（建造物等）調査票－④

調査年月日 平成 16 年 1 月 7 日

調査者 静岡文化芸術大学 空間造形学科 渡邊章瓦 連絡先 053-457-6226

市町村名	浜北市	分野	近代産業遺跡
名称	にっしんぼう・はままつこうじょう・だいさんこうじょう 日清紡浜松工場・第 3 工場		
旧名称			
所在地	〒434-8586 静岡県浜北市貴布祢 1200 番地 電話 053-586-2151		
所有者または 管理者	日清紡株式会社	連絡先	〒434-8586 静岡県浜北市貴布祢 1200 番地 電話 053-586-2151
主材料	鉄骨造：外周部 RC、内部鉄骨トラス（アングル組） 屋根：元アスファルト防水コンクリート抑え 後スレート葺き屋根を載せる		
構造及び形式	鉄骨トラス・ラーメン構造	規模	全長 133.162×117.992 15712 m ² (4753 坪)
竣工	昭和 12 年竣工	設計者	不明
	昭和 13 年稼働	施工者	鹿島建設名古屋支店
改修の記録	昭和 31 または 35 年：当初のアスファルト防水モルタル抑え屋根の上に雨漏れ防止のために波型スレート屋根を重ねる改造工事を行った。		
特徴・所見	<p>大型機械を入れるのに適していたので、現在も大型紡績機が稼働中。 建設年は昭和 12 年。機械レイアウトを自由にするためにスパンが 9~10m×12m と大きくなっている。そのために構造は鉄骨トラス構造であるが、天井の高さが 3m と低くなっている。再使用するにはいずれの用途にしても広大な面積に比較して天井が低すぎる。</p> <p>自然採光のために天窗が設けられている。雨漏れがひどかったのか、ほとんどの屋根が波型スレートで重ね葺きされている。図面は多いが改造工事、主に機械設備の補修の図面のみ。現在使用されている建物であるが、建築学的にはあまり評価すべき特徴がない。</p>		
由来及び沿革	昭和 13 年（1928）～平成 16 年（2004）3 月まで使用		
関係資料	文献・図面・写真・文書 昭和 31 年ごろから昭和 36 年ごろにかけての図面が残されている。 ①「屋根改造・屋根伏図、断面図」 ②「屋根改造・詳細図」 ③「天井断面詳細図」 ④その他雨樋収まりなどの詳細図 ⑤空調のための風道ピット図	利用状況	当初のまま 改造して利用 廃業・廃屋：平成 16 年 3 月予定 その他

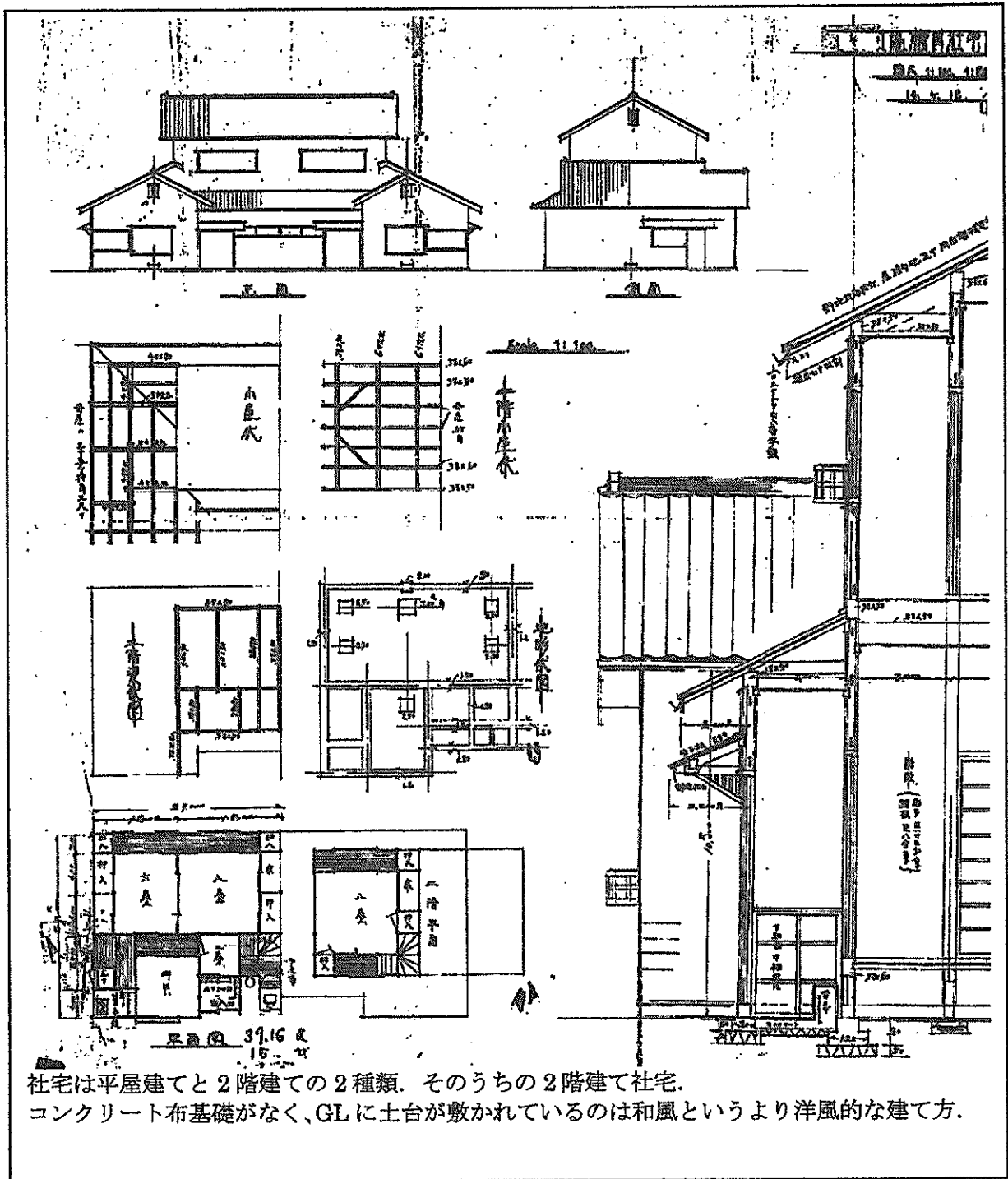
近代化遺産（建造物等）調査票－⑤

調査年月日 平成 16 年 1 月 7 日

調査者 静岡文化芸術大学 空間造形学科 渡邊章互 連絡先 053-457-6226

市町村名	浜北市	分野	近代産業遺産 住居
名称	にしんぼう・はままつこうじょう・しょくいんじゅうたく 日清紡浜松工場・職員住宅		
旧名称			
所在地	〒434-8586 静岡県浜北市貴布祢 1200 番地 電話 053-586-2151		
所有者または 管理者	日清紡株式会社	連絡先	〒434-8586 静岡県浜北市貴布祢 1200 番地 電話 053-586-2151
主材料	木造：柱ヒノキ 3 寸。コンクリート布基礎をもたない 8 寸の玉石の上にヒノキ 3 寸 8 分の土台敷き構造。2 階根太北海松 4 寸×1 尺 5 寸。		
構造及び形式	B 社宅：木造 2 階建て・2 戸 1 長屋建、軒高：20.2 尺 5 寸勾配棧瓦葺き C 社宅：2 戸 1 長屋建平屋・不明（現在独身寮に転用）	概要	B 社宅：現存 3 棟 建築面積：39.16 坪 延床面積：54.16 坪 C 社宅：平屋建て 6 棟
竣工	昭和 14 年	設計者	不明
		施工者	不明
改修の記録	不明		
特徴・所見	<p>2 戸連棟の長屋建住宅が 9 棟。延床面積 1 戸約 27 坪の 2 階建て長屋木造住宅 3 棟。平屋 2 戸長屋 6 棟（最近まで男子寮として利用）が現存。</p> <p>民間企業における福利厚生施設として、産業発展において果たしてきた役割を知る上で歴史的な価値がある。これまでにこうした一般庶民の住宅が保存されていることを聞いた事がない。工場長の 1 戸建住宅や、若い人の寮も残されていると当時の企業社会の有様を研究するのに大いに役立ったことであろう。竣工当時の写真を見ると、この地域の中において極めて際立って洒落た住宅であったように思われる。</p> <p>住居学的な面からは、昭和の初期の住宅がその後の時代の変化にどのように対応してきたのか、その足跡を知るのによい研究素材。</p> <p>建築技術の面において是非評価したいのは、床下のコンクリート布基礎をもたない玉石基礎構造の日本住宅の耐久性を調べ必要がある。その木材等の耐久性評価については、県内の木材研究の一環として静岡大学の名波助教授等の協力を得る事が望ましい。</p>		
由来及び沿革	B 社宅 昭和 14 年（1929）～平成 16 年（2004）3 月まで使用 C 社宅 昭和 14 年（1929）～平成 15 年（2003）11 月まで使用		
関係資料	文献・図面・写真・文書： ①「工場職員社宅設計図 1 / 100, 20」1 枚 S14/5	利用状況	当初のまま 一部改造して利用 廃業・廃屋：平成 16 年 3 月予定

図-6 社宅図面 昭和 14 年 5 月 KH のサインがある。



近代化遺産（建造物等）調査票－⑥

調査年月日 平成 16 年 1 月 7 日

調査者 静岡文化芸術大学 空間造形学科 渡邊章互 連絡先 053-457-6226

市町村名	浜北市	分野	近代産業遺跡
名称	にしんぼう・はままつこうじょう・ちょうせいいけ・きたいけ・みなみいけ 日清紡・浜松工場・調整池（2箇所）北池・南池		
旧名称			
所在地	〒434-8586 静岡県浜北市貴布祢 1200 番地 電話 053-586-2151		
所有者または 管理者	日清紡株式会社	連絡先	〒434-8586 静岡県浜北市貴布祢 1200 番地 電話 053-586-2151
主材料			
構造及び形式	擁壁：石積み 一部コンクリート	概要	北：北南 40×東西 50m (2000 m ²) 南：北南 120×東西 30m (3600 m ²)
竣工		設計者	
		施工者	
改修の記録			
特徴・所見	工場内の雨水排水の貯水機能と、空調冷却水の排水池。 紡績工場内の調湿を行うにあたって、豊富な地下水（1日3万トンの地下水を使用。）を用いて空調を行っている。その冷却水の排水池を兼ねているため、単なる調整池ではなく常にきれいな水をたたえて野鳥の憩いの場になっているほど自然の池になっている。 今後、工場跡を再活用するにあたっては保存活用の価値ありと評価する。		
由来及び沿革			
関係資料	文献・図面・写真・文書	利用状況	当初のまま 改造して利用 廃業・廃屋 その他

－ 4 ・ 総括

1 ・ 工場棟：

第 1、2 工場は保存に値し、第 3 工場は価値が認められない。

第 1、第 2 工場の内部の木造鋸屋根は近代産業遺跡として、また建築技術の歴史的産物としても大いなる価値があると見られる。外部のコンクリート壁は総合的な構造計算をしてからでない結論が言いえない。できれば、工場の鋸屋根は当初の瓦葺きで復元し、外周壁は美的な観点から改造が必要と考えられる。防風壁を撤去し、工場棟の屋根を当初の瓦屋根に復元する事で美しい建造物の表情が再現できる。また、工場棟は断熱工事がよく施されているので、新しい施設に転用しても断熱性能が高い高性能な建築物として再生しやすい。

第 3 工場は物資が不足している昭和 13 年に鉄骨で建築された。生産設備が次第に大型になるにつれ、建築的な柱などの制約が少ない大スパンで計画する必要があったことが最大の理由と考えられる。しかし、空調コストの削減のためか天井が低くて陰気な空間となっている。また、物資が不足して十分な屋根工事でなかった所為か、その後屋根が 2 重に被せられている。建築技術としては残すべき画期的なものはないと思われる。

2 ・ レンガ倉庫：

補強工事さえ行えば、そのまま新しい施設に生まれ変わる事ができる。

イギリス積み煉瓦には都会のような美しさはないが、かえって、日本の近代化における地方の建築職人の在り方を残すものとして面白いものになる。煉瓦が何処で生産されたかを調べる事から始まる建築探偵的な研究対象物である。かつての貨物線の引き込み跡とあわせて歴史的建造物を現代に生き返らせる近代化遺産の可能性を十分に持っている。

3 ・ 社宅：

昭和初期住宅建築の一つの典型（社宅住宅）として保存したい。

こうした昭和初期の普通の住宅を通して昭和的生活文化の研究が見直されている。その観点からも多くの研究者に評価してもらう必要がある。たとえ除却するにしても機械で壊すことなく丁寧に解体したい。生活の変化に対応してどのように使われてきたかは、住居学としても面白い研究となるのではないかと思われる。

4 ・ 貯水池：

将来、この工場の敷地全体の活用を考えると役に立つ修景資源となる土木構築物。

現在、水鳥なども来ていることから、生態系としてもこの地域に定着した人工的な自然の一つである。

5 ・ その他：

その他、工場内には様々な建造物が当初の状態に残されている。工場に付属する様々な建物についてもよく調べる必要がある。特に煉瓦を用いてつくられている構築物はよく評価したい。例えば、工場棟の便所などは工場を保存するならば改修して一緒に残すべき建造物と思う。写真がないが、賄い室と食堂なども新たに検分する必要がある。また、この工場が建設される以前から生えていた松の木なども保存に値する。

日清紡浜松工場は、遠州紡績の発展の象徴として「静岡県近代化遺産」に登録されるべき貴重なものである。これまで、紡績関係で登録されているものは、「島田紡績の事務所・倉庫」、「富士紡績(株)の小山工場」「宮崎製糸鷺津工場繭倉庫」だけであり、これだけまとまった紡績施設群はまだまだ登録されていない。早急に紡績や建築関係の研究者、そして教育関係者による今後のあり方についての計画策定等を早急に講じる緊急的な状況にあると考える。

写真資料編



写真-1 現在の正門

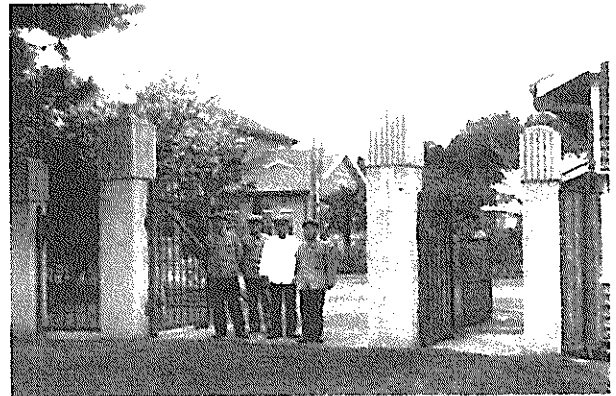


写真-2 昭和5年の正門 奥に事務所が見える。

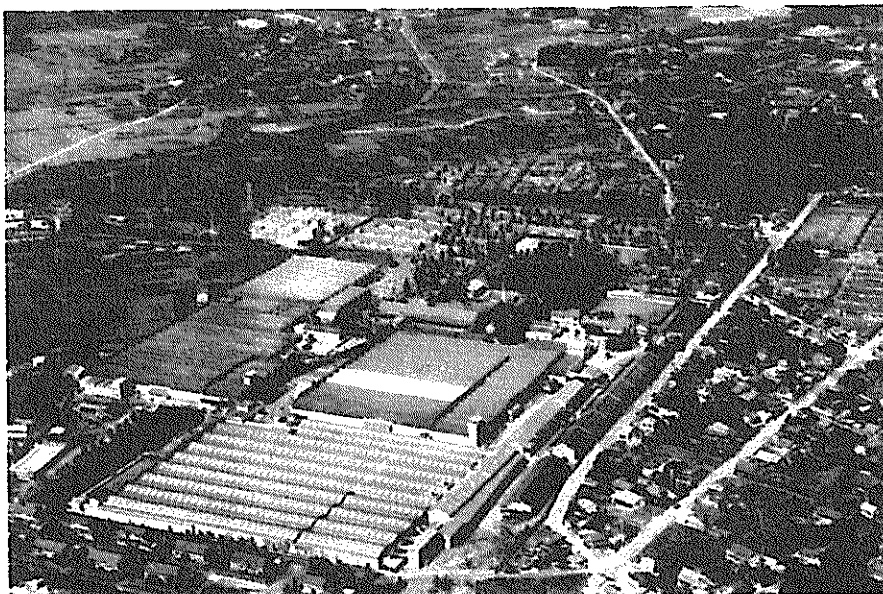


写真-3 航空写真（昭和28年頃：糸偏ブームの最盛期）工場敷地の中央に残されている松林は初代の工場長がこだわって残したもの。工場北側に女子寮が建ち、道路をはさんだ工場の外側に男子寮が建っている様子が見える。工場の南側に世帯用の社宅が建っている。この時点ですでに引込み線がなくなっている。



写真-4 昭和 2 年 創業時の構内病院 現在はなし。

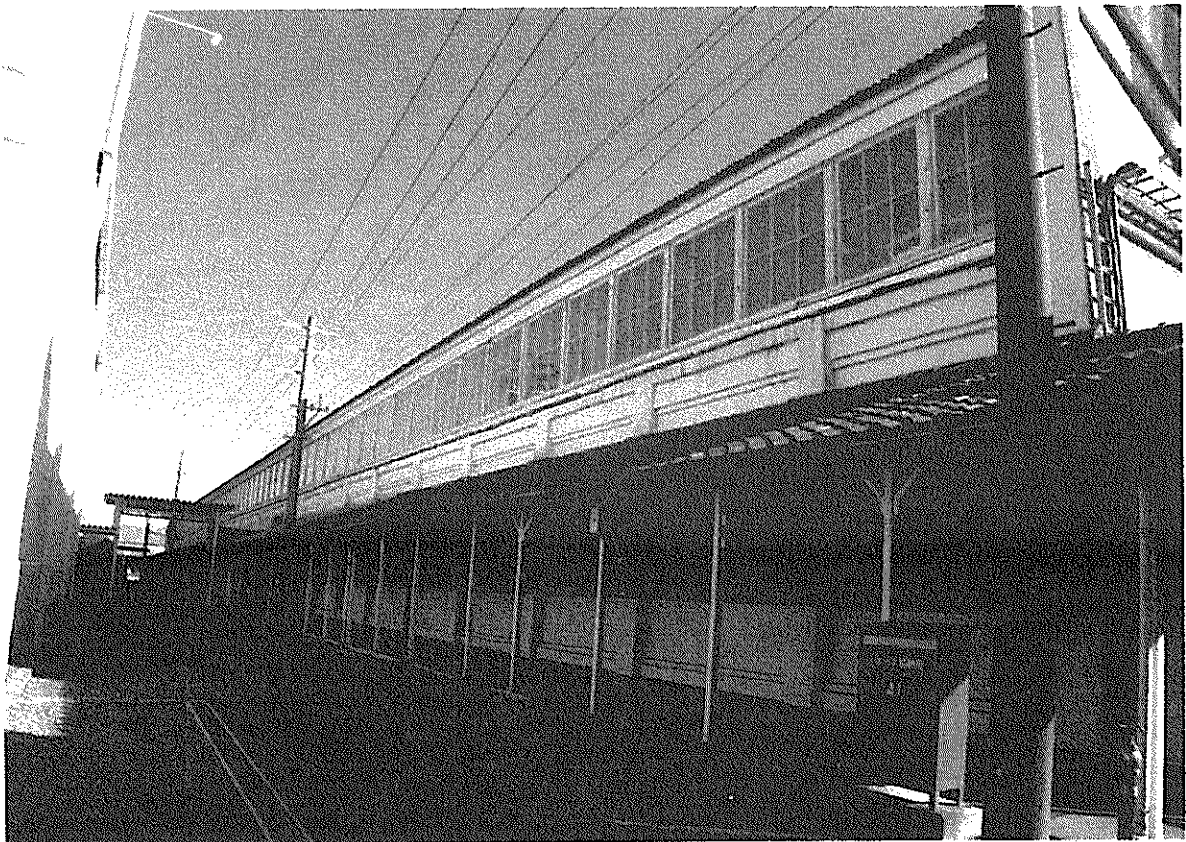


写真-5 日清紡績浜松工場開業記念絵葉書。第 1 工場の東側の写真と思われる。この時点では工場棟からの差しかけ屋根（下屋）がない。

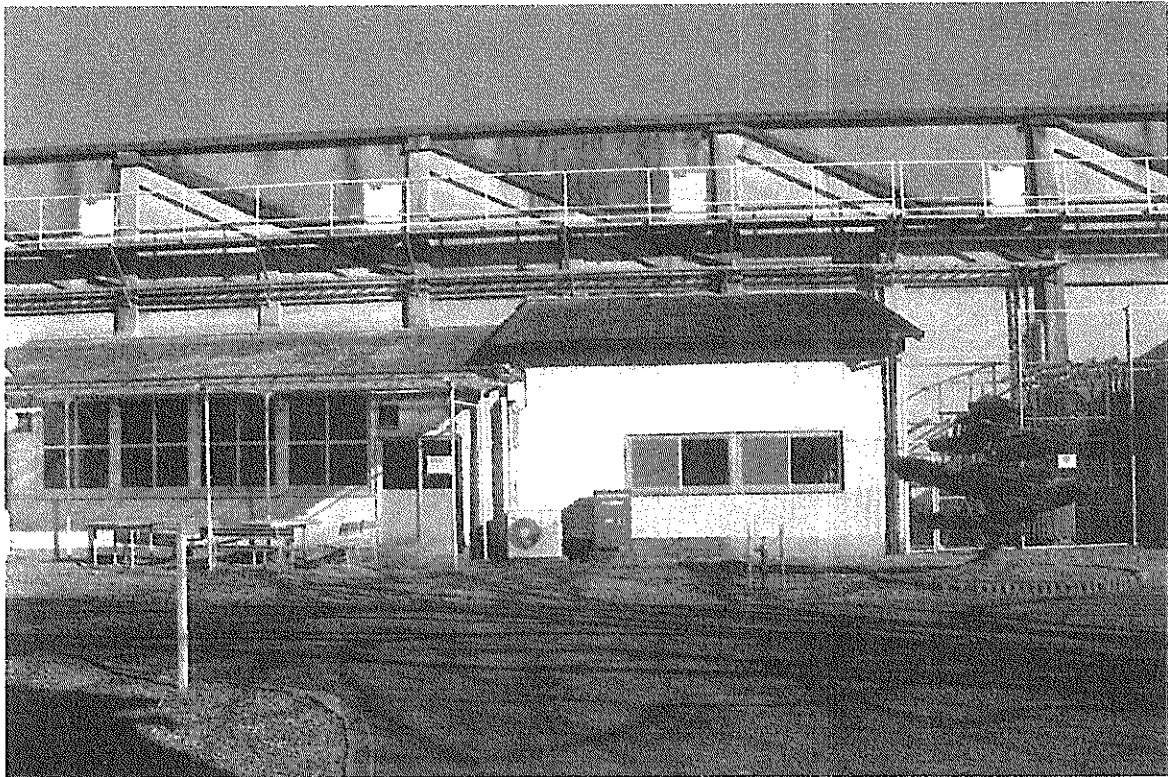
第 1. 2. 3 工場



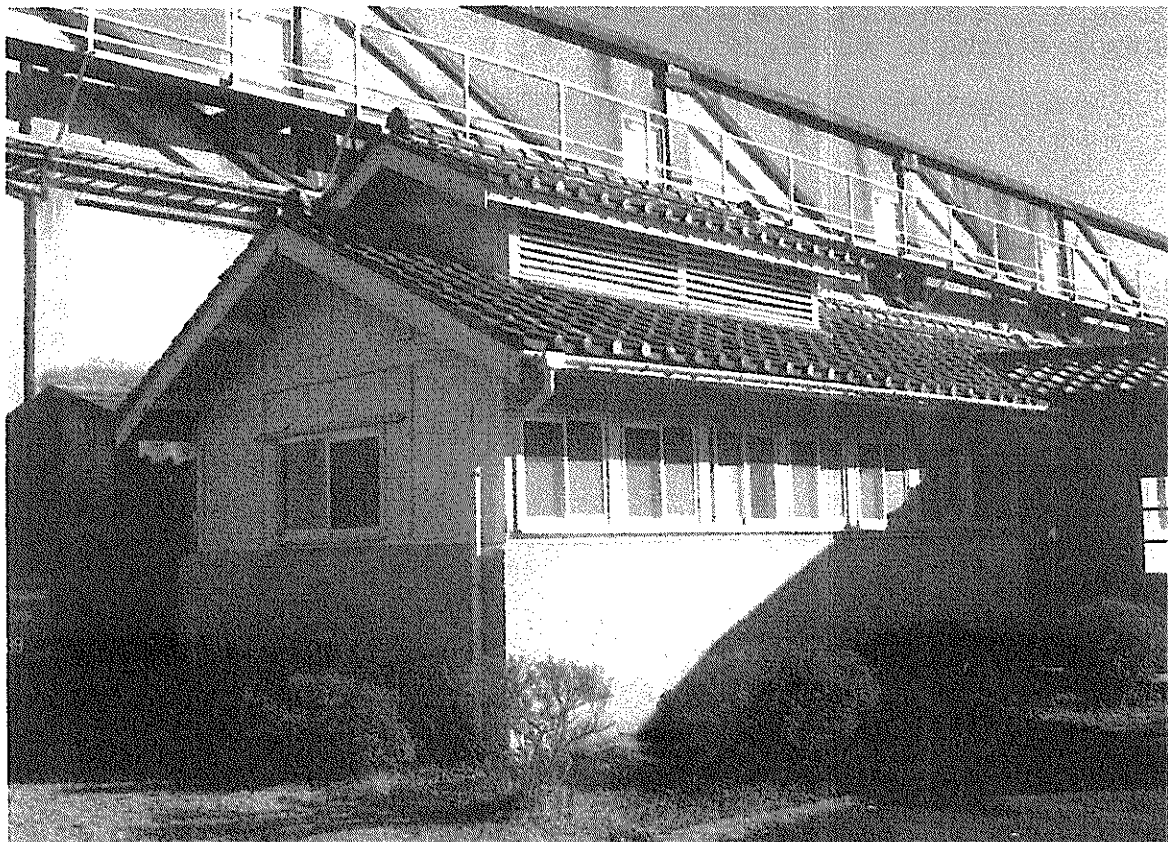
写真一六 第 1 工場の現在の内部：木造鋸屋根、多柱大空間。洋風の構造を日本の大工が施工。これだけの規模で現存するのは珍しい。第 2 工場も同じ。



写真一七 第 1 工場の北側の採光窓。木製 2 重ガラスサッシ。後につけられたと思われる葺き下ろし下屋



写真一八 第1工場の西側防風壁。西風対策として後から増設された。



写真一九 工場付属の腰下レンガ造のトイレ。かつては汲み取り便所としては清潔な施設であったと思われる。

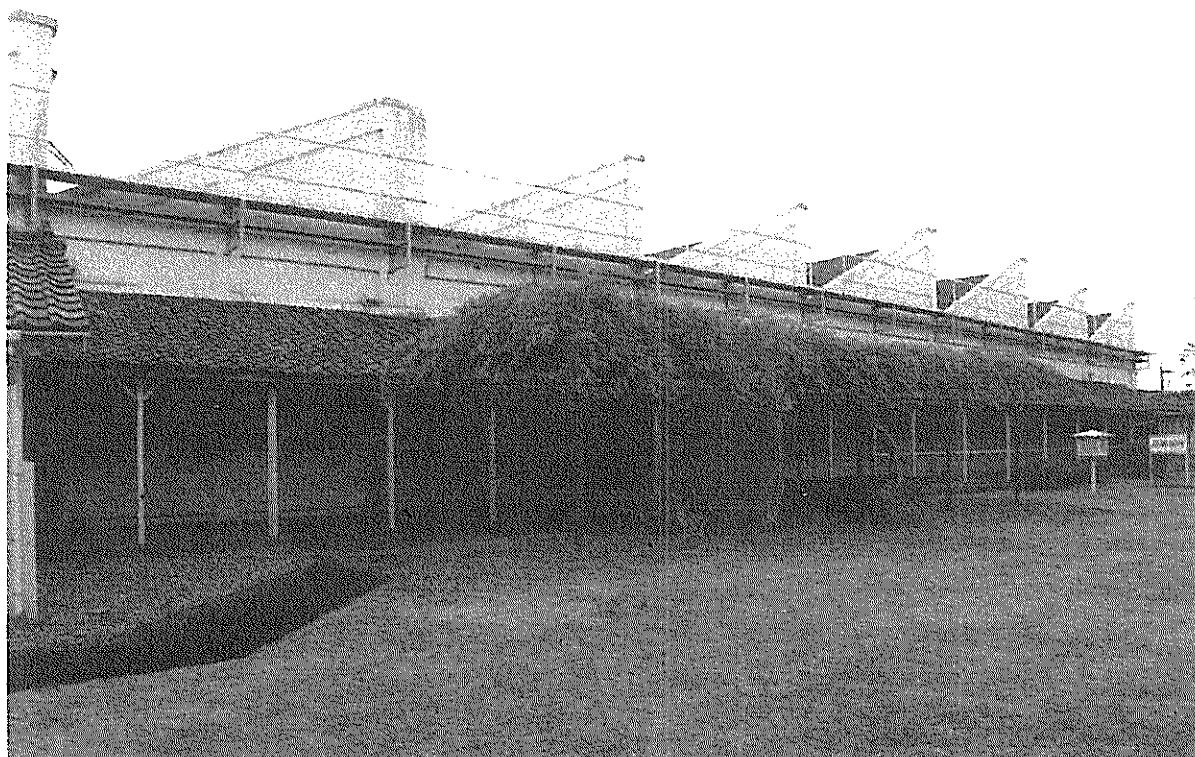


写真-10 第2工場東側。工場から葺き下ろした庇も保存状態がよい、工員の休息の場となっていた事が伺える

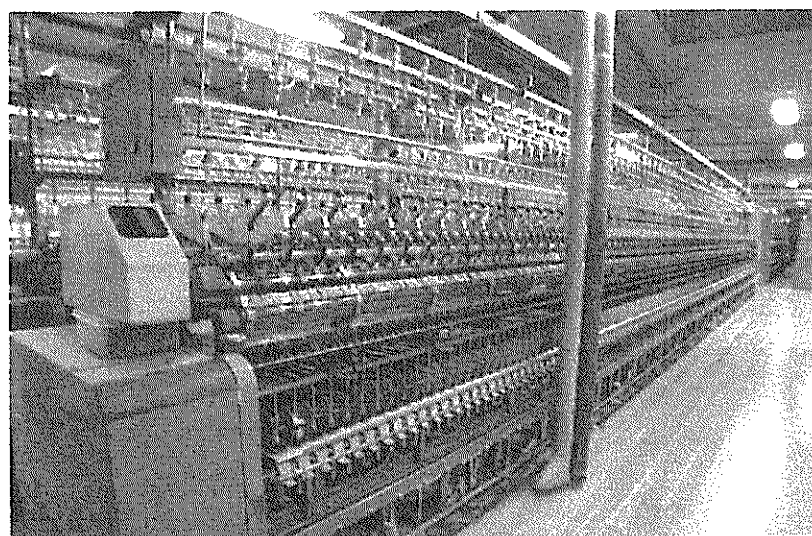


写真-11 第3工場内の現在の紡績機。

原綿倉庫

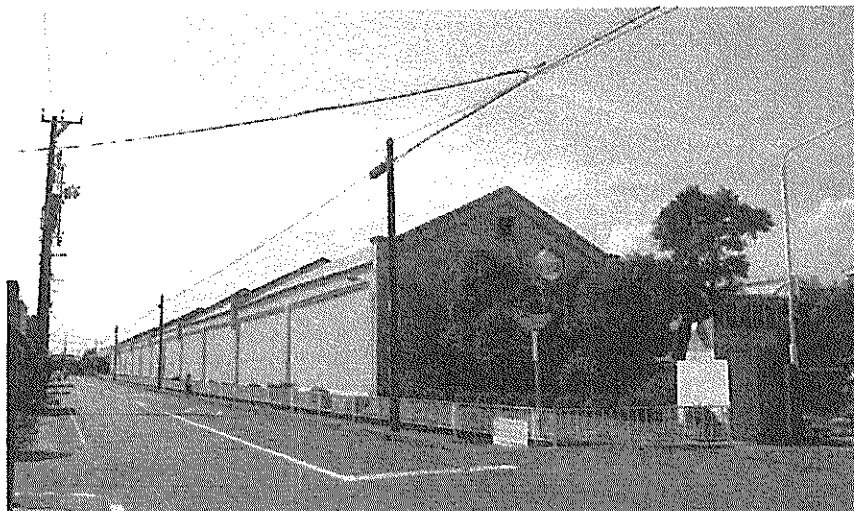


写真-12 レンガ造の原綿倉庫東側現状。右側が正門。元屋根は和瓦で葺かれていた。

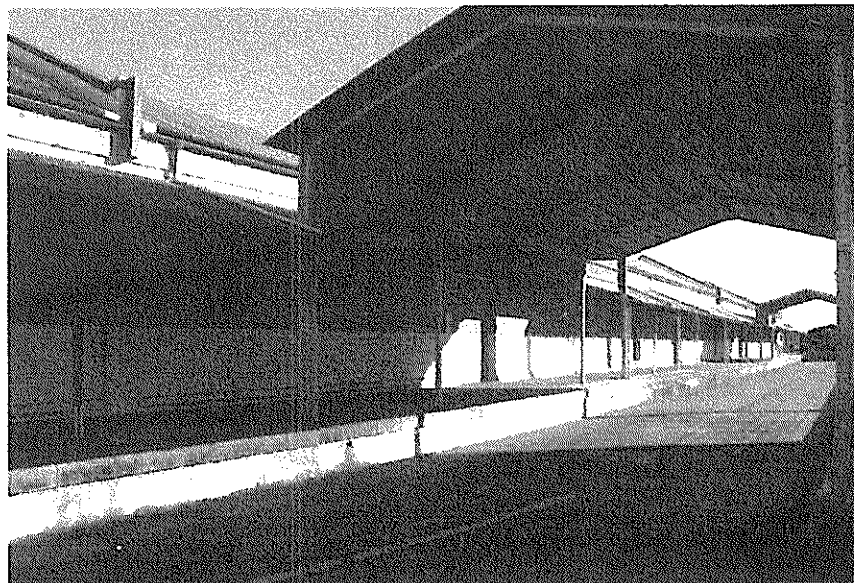


写真-13 鹿島線からの引き込みレールがあった。



写真 14-小屋組みはしっかりしている

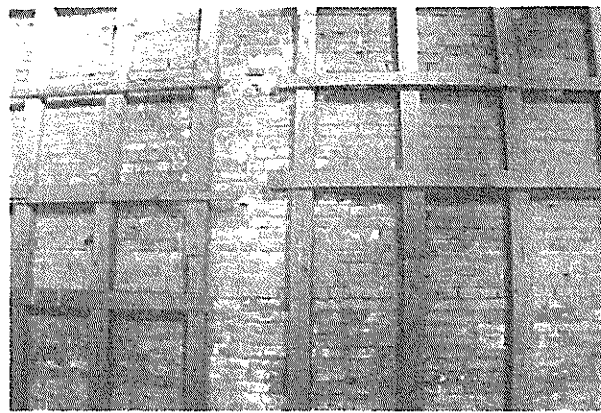


写真 15-レンガ産地は不明。レンガ積みは粗い。

社宅

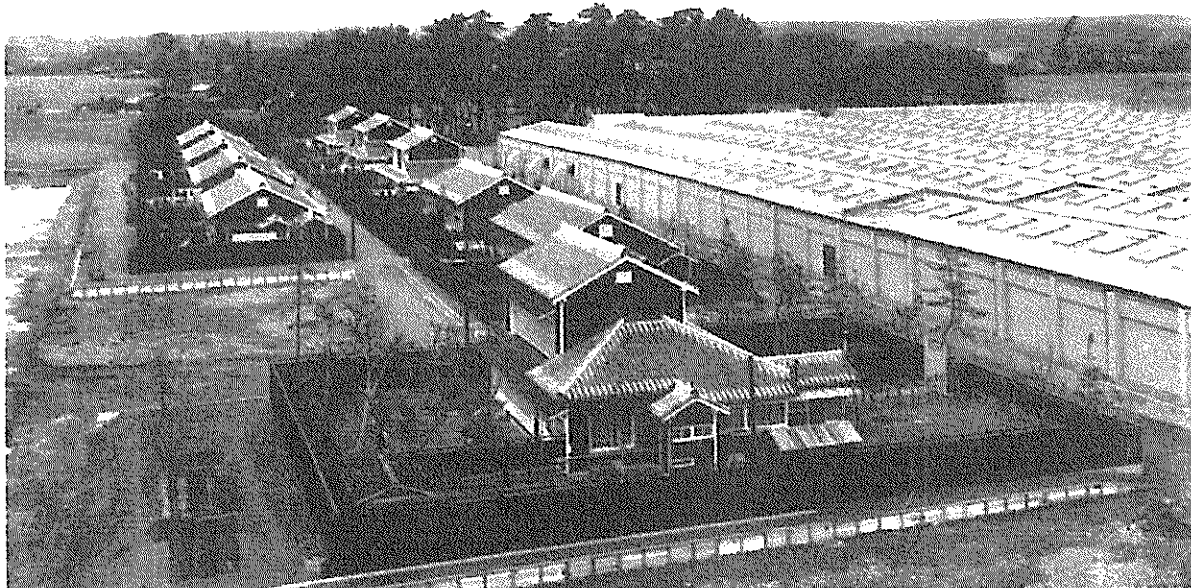


写真-16 第3工場と社宅（昭和13年）手前の建物が工場長の社宅、奥に高級幹部の社宅。



写真-17 現在の社宅。平屋建てと2階建てがある。手前の駐車場のところに工場長の社宅が立っていた。

調整池・その他

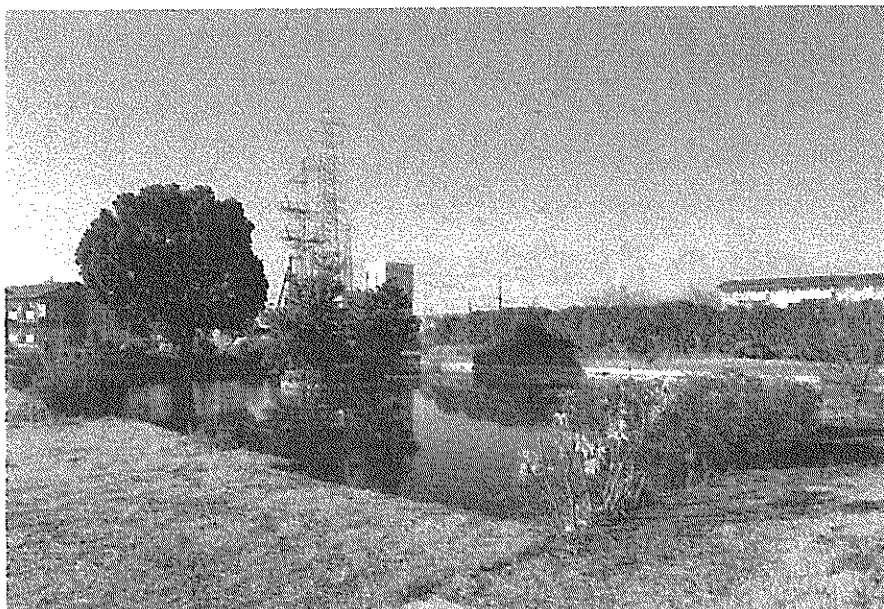


写真-18 北側の調整池



写真-19 現在の冷却水の排水

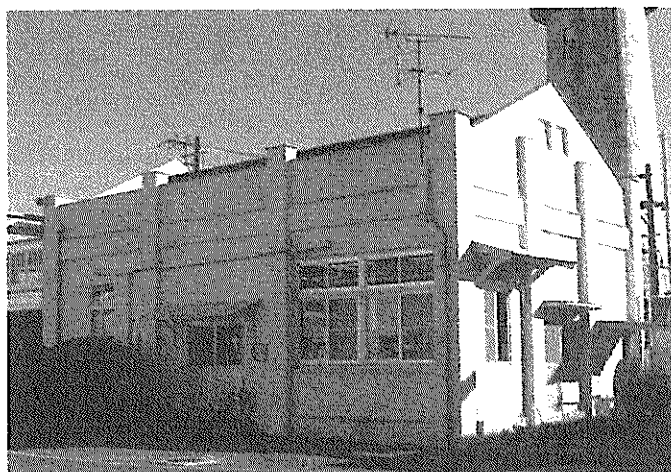


写真-20 コンクリート製の管理事務所



写真-21 初代工場長がこだわって残した松